

村松志保子 年譜

〔原島早智子：明治時代 慈善の産医 村松志保子 (第三部 完結), 2005. 3 より〕

1856 安政3年 誕生

藩主 土岐家 江戸藩邸にて、父 村松玄庵（沼田藩御典医）母 和歌子の長女として誕生。

1861 文久元年 6歳 夫人に仕え学問に励む

志保子は幼くして孔子、孟子の書を学び、六歳で沼田藩主 土岐頼知に召され城に上がり万千夫人に仕える。幼くして賢い志保子は、万千夫人に寵愛され学問に励む。当時沼田藩も文学が盛んで頼知は、沼田藩に学者の少ないことを危惧し、志保子の学習を奨励する。

1868 明治元年 13歳 夫人の元で勉学し仕える

明治維新で多くの藩士が沼田へ引き揚げ、土岐頼知一族も沼田に引き上げるが、お輿入れ間もない万千夫人、また村松家は江戸に残る。当時の状況から、下屋敷横網の別邸に居住と思われる。(推測) 志保子は沼田から頼知一族が戻るまで万千夫人の元で勉学し、仕えたものと思われる。漢学は出口蔀に、書画は樋口溪月を師とし、溪峯と号す。

1870 明治3年 15歳 女医になることを決意

万千夫人の側を辞し、名医である父玄庵に漢方医学、針を学ぶ。志保子の兄弟が生後まもなく亡くなり、父の医業を継承するものが無く、志保子は女医になる決意をし、父に医書を学び針術を修める。

1873～1874 明治6～7年 18～19歳 結婚

医師 硯三(旧姓不明)と結婚。

1874 明治7年 妹の結婚

妹春子が八杉利雄と結婚。

1876 明治9年 21歳 産婆学の必要性を感じ学ぶ

結婚後も医術に励み、英書の研究をする。産褥熱により妹春子が亡くなり、産婆学の必要性を感じ済生学舎、桜井学校に学ぶ。(明治14年卒業)

(注)済生学舎 明治8年12月私学開業願提出し、許可される。学科は医学

(注)桜井学校 明治9年9月私学開業願提出し、許可される。学科は算術

1880 明治13～14年 25～26歳 離婚

明治歌集第四篇に硯三の詠みがある。

1881 明治14年 26歳 安生堂医院 開業

多くの弟子を養成する。

1882 明治15年 27歳 淑女館及び安生堂産婆学校開設

(注) 公文書館 明治16年綴じ込みに安生堂産婆学校入学を許可する者の決まり、学科(解剖学・生理学・産婆学学説及び実技)が記載されている。

1883 明治 16 年 28 歳

医学校入学に多大な影響のある義弟利雄没。

1884 明治 17 年 29 歳

従姉弟山田寅次郎が東京薬学校卒業。安生堂を手伝ったものと考えられる。

1885 明治 18 年 30 歳 産婆会本部幹事となる

高崎男爵（前東京府知事）産婆養成所が、規模拡張のため東京産婆会を起こすにあたり同業者推薦により、本所深川南葛飾郡第六支部長、産婆会本部幹事となる。

1887 明治 20 年 32 歳 淑女館寄宿舎建設

2 月 23 日淑女館の寄宿舎設置願提出し、建設する。

頼知以外の家族（母益、妻万千、三女米、四女幾、妹寿賀、鈴、妾八重）は、柴区葺手から横綱へ移転。頼知は志保子へ身体の弱い妹寿賀と鈴二人を預け、横綱の地の一部を差し上げ、志保子は終生二人を診た。

(注) 公文書館 明治 20 年綴じ込み 教員姓名資格表

明治 19 年 産婆 村松志保子 明治 31 年 医師 武田敬治 と記載

1888 明治 21 年 33 歳

(注) 墓誌 明治 21 年 産婆学校を起こすとあるが、淑女館と切り離れたかは不明。

1889 明治 22 年 34 歳

読売新聞記事

5 月 23 日 淑女館

英漢数の諸学、裁縫、編み物、和歌、茶の湯、を教授。英国女教師 1 名。別科として産婆学も教授する。

11 月 16 日 淑女館、安生堂

英学、漢学、習字、裁縫等を教授する学校で、11 月 8 日 9 日定期試験、16 日免状授与式。生徒による英語演説、劇などが行われる。安生堂は、産婆生徒を養成する所で、速成を主とし妊婦の入院も出来、有益なる仕組みである。

1890 明治 23 年 35 歳 産院特設施設療室を設ける。

貧困の妊婦のために産院特設施設療室を設け収容した。(墓誌および明治 25 年 16 名媛の履歴にも記載。)

読売新聞記事

6 月 1 日 東京産婆会副会長となる。

5 月 28 日東京産婆会第二次総会開催、志保子は選挙にて副会長となる。

1891 明治 24 年 36 歳 東京産婆会退会し、江東産婆会起こし会長に。

東京産婆会において、仲間内の誹謗、中傷で正しく論議されないことを嘆き、二区一郡の産婆と共に退会し、その中江東産婆会を起こし会長に推薦される。(月日不明)

読売新聞記事

3 月 14 日 慈善会素人芝居

安生堂産院へ寄付のためにチャキチャキの江戸ッ子三十余名にて行なわれる。

6 月 11 日 安生堂産院慈善会

6月20日21日、安生堂産院同院生徒により、両國中村楼にてプロの演奏者、演者を招き慈善会が行なわれる。

1892 明治 25 年 37 歳

読売新聞記事

3月12日 八夫人の寄贈金

安生堂産院、村松志保子設立の施費産婦、資本の都合に依り現在毎月10名に定めているが、これを特志者の寄付金により支えていたが、この挙を褒め、慈善舞踏会収得金より金百円を割きて寄贈する。公爵夫人、伯爵夫人、子爵夫人八名。

3月18日 十六名媛当選披露

3月2日より読売紙上にて府下で活躍する女性を16分野に分け投票募集し、志保子がトップ当選した。

3月20日 村松志保子履歴紹介

4月4日 舞踏会より百金贈る。

読売新聞産医家当選者、村松志保子設立の安生堂産院が貴婦人社会の愛顧を受け、貴婦人舞踏会幹事より寄付。

5月1日 安生堂産院の慈善演劇会

安生堂産院創立以来、貧困者に無料施療入院を行なう。既に貴婦人慈善会、貴婦人舞踏会、露国皇太子殿下他多くの賛成寄付者あるを以って、規模拡大の為慈善会を起し、本月中旬開場する歌舞伎座初日を借り受け第一回慈善会を開く予定。目下会員募集中なり。

5月28日 安生堂産院慈善芝居

本社にて募集の十六名媛、淑女館長村松志保子は、欧州諸国の産院に倣い、富裕者より入院料を受け、貧困妊婦には一切館費無く入院、安産できる様産室も設ける。この事大いに紳士淑女の賛同を博し、先年露国皇太子、慈善舞踏会よりの寄付金あれども、特設産院未だ年浅く維持の方法充分ならず、養育委員長渋沢栄一はじめ東京府吏員の周旋により28日の歌舞伎座を借切り慈善芝居を行なう。観劇切符は同院と茶屋三州屋はじめ各茶屋にて切符の取り扱い協力を得る。

7月21日 両宮御息所のご寄付

小松、北白川両宮御息所から安生堂産院へ寄付あり。

8月31日 江東産婆会祝宴

村松志保子病氣全快祝い（29日同院内で本所、深川、南葛飾会員の産婆50余名で）

9月25日 亡き妹の子貞利を育てた八杉節子没

10月6日 安生堂産院の盛況

安生堂産院の院長村松志保子の精励と監督の宜しきをもって盛大となり、手狭となつて建て増し中。さらに産婆生徒の募集をする。

1893年 明治 26年 38歳

7月1日 志保子、貞利に17歳の夏休みを利用して父、祖母の故郷津和野に旅に行くことを勧める。（八杉のルーツを知ることができなかつたことを不憫に思い）

読売新聞記事

7月25日 回向院で興行中の西洋軽業は、一昨日の収入金を教育義社と安生堂に寄付

11月8日 歌舞伎座初日二日目の収入を安生堂産院に寄付

1894年 明治27年 39歳 父玄庵 87歳没

1898年 明治31年 43歳 貞利 22歳

貞利の大学時代、志保子が妹を偲び散策したり穏やかな日々を過ごす。

1901年 明治34年 46歳 貞利ロシアへ

翌年志保子に手紙を出す。

1922年 大正11年 1月 志保子没 67歳